

B-148 琉球の服装について —久米島の巫女の服装—
琉球大学 教育 渡口文子
大谷女子短大 被服 橋本千栄子

目的 沖縄においては古くから巫女(のろ、神人、根人)が祭礼、民間の信仰に深い関係をもっていた。

旧王朝時代には遠くは奄美諸島から琉球一円において政治を初め、庶民の生活に至るまで巫女の存在は不可欠なものとして、彼等の生活の中に生きつづけてきた。しかし、江戸時代後期に琉球一円が薩摩藩の支配下におかれるとともにその政策上から巫女は著しく衰退の運命をたどらざるを得なかった。幸に戦前までは奄美大島、その他の島々にその伝統的な命脈を伝承されていた。しかし、戦後の現在においては、たゞ昔日の巫女の物語を伝えるにすぎなくなつた。この事実は戦後の沖縄全域においても同様であり、その後継者が著しく減少しつつある現状にかんがみ、今回は実態調査に基づいてその実態を把握しようとしたものである。

方法 宗教の形態を沖縄本島と異にした久米島を始め、各地域の祭礼と巫女の服装について実態調査を行った。

結果 久米島においては豊年祭は旧暦5月15日、6月25日の両日に亘って行われる。最初の5月15日は祈願祭であり、祭主は白い服装を用いる。後者の6月25日は豊年感謝祭であり、各部落の巫女が参集する。祭主は色彩豊かな服装を用いることが慣習とされ、他地域の巫女とは著しく相違していることが知られる。